林の宗學も亦この方針によつて統制せんと企てた所に端を發するが、其處に宗學が所謂封建的教學たるべき性質を明瞭に示してゐる。或ひは幕末期に於て國學者の側よりの佛教攻撃に對抗せん爲に學習の範圍を擴大して普通學をも兼學し、以つて時代の趨勢に對應せんとした努力等も興味多い事實であらう。

最後に龍大の本館は明治十三年明治天皇が行幸遊ばれた聖蹟であつて、現に史蹟の指定を受けて居る。これは龍大がその光榮を廣く天下に誇示したい一事である事を記して置きたい。（菊版九六〇頁、年表六〇頁、圖版十三葉、龍谷大學出版部發行非賣品）

〔木村武夫〕

莊園の研究

中村直勝著

近時社會經濟史に對する關心が高まると共に、中世史の部門に於ては、種々の角度から莊園の研究が行はれ、それ〴〵の成果を上げつゝある。云ふまでもなく莊園の研究は、史料の忠實な採錄を基礎とせねばならぬ。從つて莊園の研究に從ふものは、齊しく、まとまつた史料を收める東大寺文書、東寺文書、高野山文書等に注意を拂ふのである。就中、東大寺文書は、それが收める史料の量及び質に於て、他の追從を許さないものがあり、莊園の研究には缺くべからざるものである。併し乍らこの東大寺文書は、尨大な通數に達する爲め、個々の論考に引用されることはあつても、全體を讀破し整理してまとまつた結果を出すことは、容易ならざることであつた。こゝに紹介する「莊園の研究」は、この困難を克服しやうとする試の第一歩である。

本書の内容は、前篇と後篇とに分れて居る。前篇は「東大寺領」と題し、先づ前篇をまとめるに際し史料として取扱はれた東大寺文書の解説を掲げ、次いで伊賀國玉瀧莊、美濃國大井莊、美濃國茜部莊、播磨國大部莊、伊賀國黑田莊に關し、成立の問題、統制の問題、貢納の問題、莊民の問題等を、史料に則して詳細に論じて居られる。後篇は「二三の莊園と莊民」と題し、著名な家領の傳領に就いて論究した三つの論考を收め、次いで伊賀國黑田莊、山城國宇治田原莊、近江國大浦莊、近江國伊香立莊等に於て展開された莊民の生活を叙述し、最後に莊園の「兵士」以下の特殊な問題に關する論考を收めて居られる。

本書の前篇が成るに就いて、如何に多大な努力が拂はれたかは、單に東大寺に所藏されて居る東大寺文書ばかりでなく、又方々に所藏されて居る東大寺文書をも採訪し、史料の蒐集に遺漏なきを期せられたことからも推測出來やう。從つて論考が極めて正確であることは、言を俟たないところである。而かもその論考は、單なる史料の羅列に止るものではなく、國史全般の進展に對する著者の見解を通じて、個々の史料を生かし、且つ史料の足らざるところを補足しやうとして居られる。この態度は、確かに本書の一つの特色として擧げられる點である。かくて、記錄莊園券契所の設立、後白河院の院政の確立、源頼朝の制覇、承久役、建武中興等が、莊園に及ぼした影響を論じて居られる箇處は、最も興味を

惹くところである。殊に承久役が莊園に及ぼした影響を論じ、承久役後の著しい現象として、身分的隷屬關係を明確に表示する寄人・神人の發達を指摘された點は、注目に價する論議かと思はれる。

後篇の家領の傳領は、政治の中樞部の動靜に對して深い理解を持つて居られる著名をまつて始てなし得るところであり、莊園の移動と政權の推移との微妙な關係に就いて、多くの暗示を得るところのものである。莊民の生活に關する叙述は、かゝる問題が殆ど顧みられなかつた時に、早くも問題の所在を示され、その後の研究に寄與されるところの多かつたものとして、劃期的なものであつた。

以上の如き內容を有する本書は、東大寺領の莊園の研究として基本的な勞作であるが、又それと同時に一般の莊園の研究にも、多くの示唆を與へるものである。併し乍ら、著者自身も云つて居られる樣に、東大寺領の莊園のすべてが、本書に於て論究されたわけではない。更らに又、本書に於て論究された東大寺領の諸莊園に於ても、問題は多く殘されて居る。今後それ等を論究し、ひいて莊園を解明しやうとするに當り、著者の長年の努力の結果生れた本書が、多くの貢獻をなすであらうことを思ふのである。(菊版八〇九頁、星野書店發行、定價九圓)　(田井啓善)

彙　報

史學研究會

大會　十一月四日(土)、五日(日)の兩日に亙つて、恒例の本會大會は擧行せられた。その大概を摘記すれば、

第一日は午後一時より樂友會館講堂に於いて公開講演會を催し、左の如き講演があつた。折からの秋雨にも拘らず會する者約百名。

一、高麗と明との場合　　末松保和氏
一、興亞地政學大意　　小牧實繁氏
一、南越建國の事情　　和田清氏

右の中末松氏講演は本誌本號に揭載、和田・小牧兩氏の講演も追つて本誌に揭載の筈である。

第二日は見學日として午前十時醍醐三寶院に集合、參會者は京大倶樂部會員をも併せて約百五十名、先づ集會所の廣間に於いて本學助教授中村直勝氏の「醍醐三寶院に就いて」の講話を聽いた後、本學文學部囑託赤松俊秀氏說明の下に國寶の殿舍に入り、玄關より葵の間、秋草の間、勅使間をはじめ震殿、純淨觀、本堂、白書院、枕流亭等各部の建築と障屏畫を巡覽、史蹟名勝に指定された庭園を眺望した後、五重塔及金堂に到り、塔內の板繪や金堂の佛像を縱覽して正午集會所に還り一同晝食を俱にして歡談した。